〈2006年度企画展報告〉

□再建400年記念□

和歌浦天満宮展

――よみがえる近世和歌浦の原風景――

1．企画展開催と資料調査について

和歌浦天満宮は、よく知られた存在であり、とくに建造物については修理に合わせて調査も行われ、楼門と本殿は国指定の重要文化財になっている。2006年は浅野氏による天満宮の再建から丁度400年目に当たる年であったが、4月に和歌浦天満宮と和歌山大学紀州経済史文化史研究所(以下紀州研とする)の共催で企画展を開催することが決まり、6月には展示会に向けて、上村雅洋所長、海津一朗副所長、柏原卓幹事、藤本清二郎幹事を中心とした紀州研メンバーに加えて、鳴海祥博和歌山県文化財センター建造物課課長と近藤壮和歌山市立博物館学芸員の参加協力も得て、天満宮に保管されている文書類、棟札、宝物などの調査が行われた。この調査で、天海の書状、慶長11(1604)年の再建時に制作された三十六歌仙額(36枚中の18枚)、木製の狛犬などの貴重な文書、宝物の発見があった。この企画展に向けての調査で、これまでの部分的な調査では確認されていなかった貴重な資料、宝物類が存在することが分ったのであるが、天満宮に現在保管されている資料類、あるいは宝物類の全体像の大よそがほぼ明らかになったことも、大きな成果であった。こうした成果は、11月6日から17日における和歌山大学での展示会(会場：附属図書館3階展示室、来場者数259名〔名簿記載者数〕)及び11月20日から26日における和歌浦天満宮での展示会(来場者数292名〔名簿記載者数〕)で公開され、和歌浦天満宮に所蔵されている主だった資料、宝物類が初めて公開される場としての意義を有することになった。和歌山大学と和歌浦天満宮における展示会、並びに11月23日に行われた「展示記念シンポジウム・見学会」(シンポ

ジウム参加者数90名〔名簿記載者数〕)は、いずれも成功裏に終了している。和歌山の社寺と共催でこのような展示会を開催することは、紀州研としても初めての試みであったが、その成功は、今後にも活かすことのできる大切な経験となっている。また、調査及び企画展とシンポジウムの準備には、和歌山大学大学院教育研究科の院生、また教育学部の学生にも、貴重な学びの場とすべく参加して頂いたが、彼らの下支えとなる活動なしには企画展とシンポジウムの成功もなかった。最後になるが、展示会並びにシンポジウムの成功は、小板政男和歌浦天満宮宮司の熱意に負うところが大きかったことを、とくに記しておきたい。

(文責：米田頼司)

2．企画展について

以下に、企画展の梗概と展示品及びこれに関わる解説とシンポジウムに関わる資料を掲載し、報告としたい。

Ⅰ．企画展の「ごあいさつ」と「展示説明」

A　「ごあいさつ」

紀州経済史文化史研究所では、毎年企画展示を開催していますが、今年のテーマは和歌浦天満宮です。

今年は、浅野氏による和歌浦天満宮再建から400年目に当たります。和歌浦(わかのうら)には、和歌浦天満宮以外に和歌三神に数えられる玉津島社があり、紀州徳川氏の創建になる東照宮がありますが、これらと並んで和歌浦天満宮がその存在感を示していることは、改めて言うまでもありません。古代と近世を象徴する宗教施設・文化拠点として玉津島と東照宮の所蔵する宝物や歴史・文化資料は、すでに博物館などで展示公開され、広く知られるところとなっています。しかしながら、古代と近世を繋ぐ位置にあると考えられる和歌浦天満宮の展示は、これまで一度も開催されたことがありません。したがって、今回の展示品のほとんどは、ごく一部の研究者などを除きその存在は知られる

ことのなかったものです。

再建400年という記念すべき年に開催される展示として、和歌浦の歴史と文化に関する新たな研究の起点となり、和歌浦の歴史と文化への関心が一層高まる機縁ともなりますれば、私たちの試みは達成されたことになります。

2006年11月6日

紀州経済史文化史研究所

毎日新聞　（第3種郵便物認可）

知られざる文化財 一堂に

再建400年迎える和歌浦天満宮

和歌山大付属図書館で企画展

展示されているこま犬や後陽成天皇の書
＝和歌山大付属図書館で

木製こま犬、僧・天海の書状など30点

今年再建から400年を迎える和歌浦天満宮（和歌山市和歌浦西2）の文化財を多数初公開する、和歌山大学紀州経済史文化史研究所の企画展が17日まで、同大学付属図書館（同市栄谷）で開かれている。紀州藩主が保存を命じた木製のこま犬、徳川家康のブレーンを務めた僧侶・天海の書状など、同研究所の調査で見つかったものを含む約30点を展示。同天満宮の品を一堂に集めた展示は初めてで、同研究所は「知られているようで知られていない天満宮に注目してもらえれば」としている。

中世には和歌浦に「天神社」があったが、戦国時代には廃れていた。1606年、浅野幸長によって再興。後陽成天皇をはじめ、京都の有力者の支援があった。1619年、浅野家の後を受け徳川頼宣が紀州に入ると、天神社の神主が紀州東照宮の神事を行うなど、両社は紀州藩の保護下で密接な関係を持って存続した。

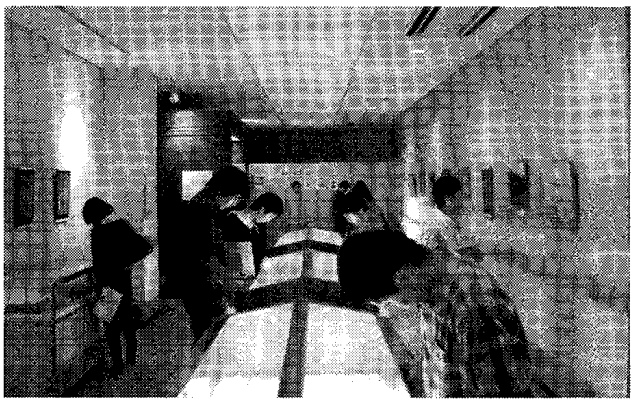
こま犬は、紀州藩10代藩主、徳川治宝が1836年に神社の大規模な修復をした際、前足などが欠けていたため、「古く貴重なものだ」として内陣に納めるよう命じたことが箱に書かれていた。作風から中世末期の作とみられる。天海の書状は、紀州東照宮の遷宮の際、天神社の社人に黒装束の着用を求める内容で、両社のつながりや天台宗とのつながりを探る貴重な史料だ。

ほかに、故人の和歌を清書して納めたとみられる「奉納和歌三十首」や、伝承はあったが、今回初めて存在を確認できた「三十六歌仙絵馬」など、江戸時代の文化・習俗を知る品が並ぶ。

午前10時～午後4時半。無料。問い合わせは同研究所（073・457・7891）。20～26日には、同天満宮社務所でも展示される。

【最上聡】

毎日新聞記事('06.11.15)



展示会場(和歌山大学附属図書館３F展示室)

B　「展示説明」

(1)中世の和歌浦天満宮

和歌浦天満宮がたしかな史料にその姿をあらわすのは、1470年(文明11)のことである。

日前国懸神宮神主である紀国造が、飛鳥井雅親とともに紀三井寺の舟にて天神(＝天満宮)に参詣し、和歌と蹴鞠の宴を催したという記録がある。

(2)近世天満宮の成立

社伝によれば、康保年中(964～68)橘直幹が大宰府からの帰路、和歌の浦に立ち寄り、天神信仰が広がったとされる。天神社勧請の時期は不明であるが、中世には和歌の浦に天神社が存在していた。戦国期に同社は廃れた状態であったが、秀吉の統一後、和歌山城主となった桑山重晴によって再建の端緒が切り開かれ、関ヶ原後入国した国主浅野幸長(よしなが)によって、慶長10年(1605)～同11年に本格的に再興された。この再建には後陽成天皇・関白近衛信基や儒学者藤原惺窩など京都の有力者の支援があった。

元和５年(1619)には、徳川頼宣入国後に天神山の半分が東照宮に割譲され、天神社の神主が東照宮の神事を行うなど、密接な関係を持つ神社として、江戸末期まで紀伊徳川家の保護の下に維持されてゆく。天海以下の天台宗雲蓋院僧侶(東照宮別当寺)との関係も元和６年に発生した。元和７年当地を訪れた林羅山は当社を北野天満宮・太宰府天満宮と並び称し、後に社伝に日本三

聖廟の一つと記されている。

このコーナーでは近世天満宮の成立を示す文書を展示した。

(3)棟札に見る天満宮の発展

和歌浦天満宮には、たくさんの棟札が残されている。棟札は、桑山氏、浅野氏、徳川氏の時代のものが継続してあり、そこには和歌浦天満宮の歴史が刻まれている。棟札には、建物の造立・再建・修復にあたって、建物名、願主、大工、年月日などが記され、その銘文から建物の変遷や修復当時の様子などが明らかになる。

和歌浦天満宮の最も古い棟札は天正16年(1588)のものであり、この頃すでに桑山氏によって荒神社が造立されていたようである。慶長11年(1606)には浅野幸長による神殿の造立がなされ、本殿や楼門などが建立され、現在見られるような和歌浦天満宮の原型が整えられた。その後、徳川氏による修復等の整備が継続的に続けられ、万治元年(1658)以降、約20年ごとに何らかの修復が実施されてきた。天保6年(1834)の治宝(はるとみ)による修復は大規模なものであり、この時に神社や神宝の再評価がなされた。

(4)奉納品の語る民衆文芸

奉納された文芸は江戸時代の和歌と俳諧が多い。①和歌は、天神御詠歌と「歌仙」数種の古歌以外は、江戸時代の多様な詠草である。菅原道真の800回忌、850回忌などに天満宮社主らのグループが詠みあったり、個人または連中が奉納したもの、その他の折々(月花の季節、霊夢に促されて、故人の追善)に個人が奉納したもので、短冊・厚紙、継ぎ紙、巻子、軸装、冊子などの形態がある。②俳諧は、和歌山の島順水が自他の作を刊行した数種の俳諧集と歳旦帖が主で、奥州の天満宮社主から贈られた俳諧集1冊もある。

作者は、天満宮社主ら神官・僧侶・武士などのグループから町人の島順水らまで広がっている。これら奉納文芸を通して、庶民層にまで文化が花開いた背景と、学問の神様としての天神にそれを奉納した人々の信仰が偲ばれる。

II．主な展示品と解説

(1)中世の和歌浦天満宮

1　飛鳥井殿下向之儀式

これは日前宮神主(第64代国造　紀俊連)の自筆とされる文書で、和歌・蹴鞠の師範家である飛鳥井雅親が紀俊連の熱心な勧誘に応じて雑賀の地を訪れた、文明11年(1470) 5月4日～9日までの6日間の記録である。

この際、雅親・国造一行は和歌の神である天神(＝天満宮)に参拝しており、天満宮の登場する最古の文書史料であるといえる。

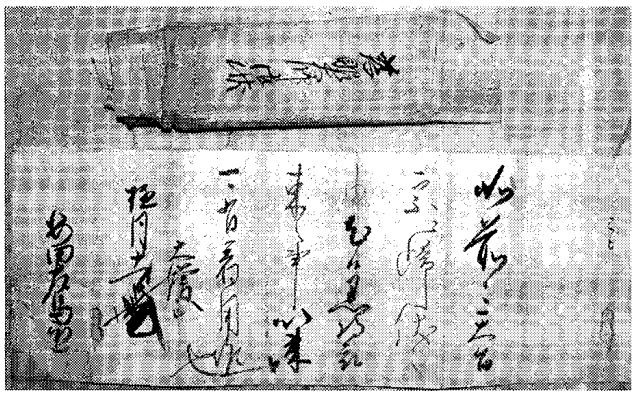
(2)近世天満宮の成立

1　浅野幸長寄進状(写)　慶長6年(1601)

慶長5年(1600)紀伊国主となった浅野幸長が、翌年、和歌浦天神社に宛てた証文。浅野氏の所領である海士郡和歌村の土地10石を天神社に寄附するという内容である。「社僧」は神仏習合を表している。

2　天海(慈眼大師)書状　元和6年(1620)〈推定〉

元和5年(1619)徳川頼宣が紀州に入国した、同6年から7年にかけて東照宮が造営された。この遷宮の導師は天台宗の天海であった。この書状は天海が天神社の社人安田左馬丞に出したものである。文面は来たるべき遷宮での黒装束着用を求めたものである。



天海書状

3　徳川頼宣寄附状　寛文4年(1664)

紀伊徳川家初代藩主頼宣は、はじめ天神社に社領として23石の地を寄附し、寛文4年(1664)にさらに2石を加増した。その場所は名草郡馬場村の内である。これによって、天神社は合わせて25石の地の年貢を収納することとなった。

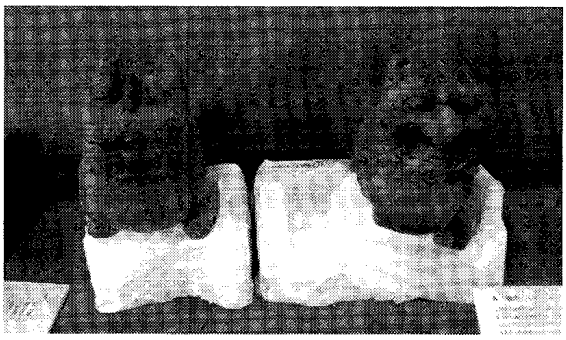
4　殺生禁断御証文　寛文9年(1669)

初代藩主頼宣の時代、寺社奉行下条弥右衛門・大沢善右衛門が、和歌浦天

神社に宛てた証文。和歌浦天神社は東照宮の境内地にあり、そのため、「社頭殺生禁断」の証文は、直接天神社宛てには出さないという趣旨である。当時、和歌の浦全体が東照宮境内地と考えられており、玉津島神社・矢田神社も同じ扱いであった。

5　狛犬　1双　天正16年(1588)〈推定〉

この狛犬は前足などが大きく欠落していたため、天保7年(1836)に第10代藩主徳川治宝が、天神社の大修復をした際に、古く貴重な物として内陣に納めるよう命じた(箱の蓋書)。素朴な表情や、胸の張り具合などの様式から、中世末期の作であり、天正16年に造立された三宝荒神社の狛犬と推定される(『関南天満宮伝記』)。右が阿形(あぎょう)、左が吽形(うんぎょう)。



狛犬

6　龍彫物　1対

寛文4年(1644)の伝記「関南天満宮」によれば、桜門の扁額(「高陽門」近衛信尹筆、慶長11年9月)の両脇に添えられていた。その後、扁額から取り外されていたが、天保7年(1836)に狛犬と同様に、治宝(はるとみ)が天満宮の大修復をした際に、内陣へ納めるよう命じた。

龍彫物

7　天神名号　1幅　後陽成天皇筆　17C初

菅原道真の神号「南無天満大自在天神」。慶長11年(1601)天神社再興時に寄進されたものと推定。御陽成天皇(1571－1617)は尊鎮龍を代表する能書。名号・額など大字の書に添付の才を発揮した。享保5年(1720)京都の右筆である了仲が作成の折紙に「御陽成院宸筆」とある。同名号書は京都高台寺や大宰府天満宮にも遺されている。

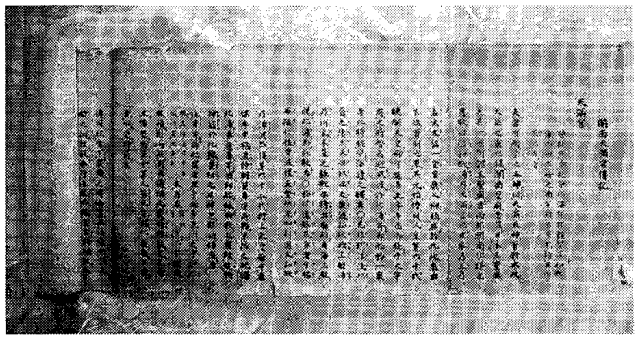
8　天神名号　1幅　霊元法皇筆　17C後半

菅原道真の神号「南無天満大自在天神」。貞享5年(1688)5月25日に坂田(和

歌山市内)了法寺の僧宥恵から奉納されたとの記録がある。箱書「太上法皇宸翰　天神名号」とある。霊元法皇(1654－1732)は正徳4年(1714)に玉津島社に石灯篭1対を奉納しており、和歌浦に関心があった。文芸の才に優れ、とくに歌道に造詣が深い。

9　関南天満宮伝記　1巻　寛文4年(1664)成立

寛文4年、神主の安田祝部正俊が天神社の「古来流伝之事実」を記したもの。幅27.3cm長さ(本紙)739.5cm。元は袋綴の冊子状。同社の由来・神事、棟札・古文書、別宮・末社、殿舎(建造物)員数、神財員数、敷地・氏子、境内・境界などを書き上げている。古い神財として歌仙絵・御鈴・高陽門の額・絵馬・金榊・連歌懐紙・狛犬・鏡・綱敷神影などの存在を示す。



関南天満宮伝記

10　関南聖廟最極神秘録　1巻　17C初成立

「当宮は本朝三聖廟のその一つにして明光浦に鎮座し給ふ」と始まる。同社の神事秘伝、祭式を代々唯一の神主に伝えようとして記されたもの。「関南天満宮伝記」と筆跡が似ており、同じ安田正俊の作と推定される。毎年6月晦日夕に御手洗川原で祓のあと、影向石を拝するときご詠歌を吟ずるなどの行事の様子がわかる。

(3)棟札に見る天満宮の発展

1　天正16年造立棟札　総高63.4cm×上幅13.3cm、材質　杉

天正16年(1588)8月に、桑山重晴によって造立されたことを示す。和歌浦天満宮では最も古い棟札である。桑山時代に当地において荒神社と思われる建物が存在していたことを示す貴重なものである。江戸時代に、「三宝荒神社」に収められており、箱書には、「関南天満宮末社　荒神社」とある。

2　慶長11年造立棟札　総高114.4cm×上幅20.0cm、材質　檜

慶長11年(1606)11月24日に、浅野幸長によって神殿が造立されたことを示す。神道の吉田兼右が指導した厳島神社の「神殿元亀二年造立棟札」の書式を

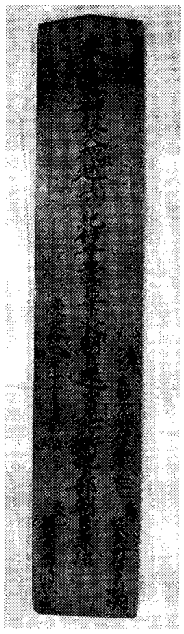
踏襲した稀少な棟札である。吉田兼治は兼右の孫にあたる。大工の塀(平)内吉政は、紀州根来大工平内正信の父である。

3　延宝5年修繕棟札

総高96.5cm×上幅21.2cm、材質　檜

延宝5年(1677)4月1日に、徳川光貞(2代藩主)の命によって、本廟及末社拝殿回廊唐門楼門瑞籬等が修復されたことを示す。また、万治元年(1658)にも徳川頼宣(初代藩主)によって修繕がなされたことを記している。裏面に「筆者李梅渓」の貼紙がある。

4　天保6年修繕棟札　　総高147.5cm×上幅26.5cm、材質　檜



慶長11年造立棟札

天保6年(1834)12月に、徳川治宝(10代藩主、当時隠居)の命によって、天神社并瑞籬唐門拝殿鳥居御本地堂庁家楼門其外末社等が修補されたことを示す。同年12月に御仕入方へ修復を命じてから、1年がかりで作業をして完成させた。

(4)奉納品の語る民衆文芸

1　奉納和歌三十首　寛文元年1661年。巻子1軸

奥書に「寛文元年閏八月」「森十兵衛忠雄　行年二十三」とあり、料紙すべてに灰色の蓮の絵を背景とする。故人のため遺作を清書して奉納したものと思われる。ちなみに元禄7年(1694)、森十兵衛在原忠貫が「詠十五首和歌」(十一面観音真言を冠す)を奉納している。

2　八百回忌奉納和歌三十首(短冊)

元禄15年(1702)の菅原道真八百回忌神事に奉納された20名の作品30首の短冊。別紙「名前覚え」に作者一覧が見える。

3　奉納菅廟十首和歌　享保13年、清成。和歌：大型厚手和紙1枚、付記：同1枚

八百回忌和歌三十首の作者の一人清成は、20余年後の享保10年(1725)に知人の霊夢に天神が「清成はなぜ歌を奉納しないか」と言ったことを知り、恐縮して歌作し同13年(1728)に「十首和歌」を奉納した。清成は「九月十三夜

社頭二首」(年不詳)もある。

4　八百五十年御神事奉納十首和歌(短冊)

宝暦2年(1752)の菅原道真八百五十回忌神事に奉納された20首の短冊。別紙「目録」に作者一覧が見える。

5　梅松桜奉納和歌(冊子など)

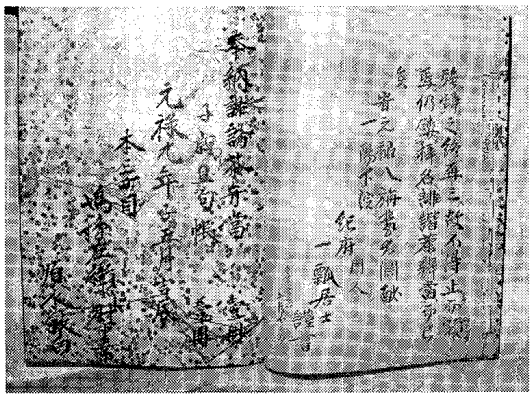
宝暦2年の八百五十回忌に合わせて、「紀の川連中」「粉河連中」などから「梅」「松」「桜」で題詠して奉納している。

6　島順水　俳諧集(京寺町二条上ル　井筒屋板)

『俳諧破暁集』元禄3年(1690)、嘉『俳諧渡舟』元禄4年(1691)、『俳諧茶弁当』元禄8年(1695)。島順水は京大坂で俳句修行と交友をした。奥書に本町在住とする。架家作に別荘(『茶弁当』)。各集には言水、鬼貫、西鶴、芭蕉など著名俳人を含む京大坂の俳人と自身の句を載せる。『茶弁当』には「紀州門人一瓢居士」の跋文がある。

7　島順水　歳旦(京寺町二条上ル　井筒屋板)

年末年始の小さな句集。『申歳旦』元禄5年(1692)、『亥歳旦』元禄8年(1695)、『子歳旦』元禄9年(1696)の3冊。前二つは自他の作を載せるが、三つ目は自作のみ。



島順水　歳旦

(5)三十六歌仙絵馬と縁起絵巻

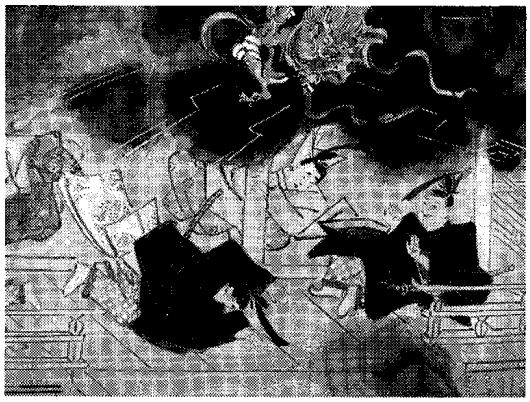
1　三十六歌仙絵馬　慶長11年(1604)

今回その存在が確認されたもの。その存在については、話として伝わっていたが、15年前の市博の調査でも発見されず、確認されてこなかったもの。したがって、今回初公開。書は近衛信基。絵師は狩野孝信を候補として考えることができる。美術史的にも価値ある作品であるが、剝落が激しく保存状態は良くない。

三十六歌仙絵馬

2　縁起絵巻　貞享２年(1685)水野隠岐守奉納　三巻　絵師滝川徳左衛門

荏柄本の模本と考えられてきたが、最近の研究では荏柄本と共通の粗本からの模本であるという見解が示されるようになっている。



縁起絵巻

(6)天満宮と地域社会

1　天満宮道具箱(祭礼道具)と菅公像(綱敷天神像)掛軸

展示品は、和歌浦の旧家に伝わる和歌浦天満宮の祭礼道具箱と綱敷天神像である。箱蓋の裏面に「組合分離之節新整」とあり、当時の戸長である奥野久三氏以下役員当番の名前が列記され、「明治二十二年旧八月新整」との記載がある。組合とは、「和歌村採藻営業人」(団体)と思われる。箱側面に「和田番元組」とあることから、組合が和田と中と津屋の三つの地縁的グループによって構成されるものへと再編成されたときに新調されたものと思われる。かつて海苔組合では毎年海苔養殖の場所の使用権を入札で決めていたが、この入札日には天満宮で豊作祈願の神事が行われ、同時に地域でも神像掛軸をはじめ祭礼道具を飾り立てて豊作祈願を行ったという。地域での祭礼は三つの地区毎に行われたものと思われ、展示している掛軸と道具類はその折に和田地区で使用されたものと思われる。

綱敷天神像と天満宮道具箱(祭礼道具)

展示品は、天満宮と和歌浦で海苔養殖を営んでいた人たちとの密接なつながりを示している。

2　菅公像(綱敷天神像)　1幅　19世紀

描かれているのは松と梅を背景にした憤怒の姿の道真である。とぐろのように巻かれた綱の上に座っている綱敷天神像である。社伝にも和歌浦天満宮が綱敷天神と呼ばれることが記されているが、この掛軸はこれに対応した図

像になっている。19世紀の作と考えられるが、作者名として記されている藤原秀信については不明である。

3　掛軸と生花の飾り立て　昭和27年(1952)

毎年7月24日、25日の和歌浦天満宮のお祭りの時、明光通の町屋では通りに面した部屋の格子を外して、趣向を凝らした飾りを披露していたという。

Ⅲ．附属資料

○「(2)近世天満宮の成立」関係

①(包紙)「和歌天神証文」

為和歌天神領
於海士郡和歌村
拾石之所令寄進者也
仍如件
左京太夫
慶長六　　幸長(花押)
十二月六日

社僧
社人　中

(書き下し文)

和歌天神領として
海士郡和歌村において
拾石の所、寄進せしむものなり。
仍てくだんの如し。
左京太夫
慶長六　　幸長(花押)
十二月六日

社僧
社人　中

②(包紙)「慈眼大師御状」

已上
如前々天台
宗ニ帰伏之
由尤候黒装
束事以来者
可有着用候也

(書き下し文)

以上
前々の如く、天台
宗に帰伏の
由、尤もに候。黒装
束の事、以来は
着用あるべく候なり。

大僧正
極月十一日　（花押）
安田左馬丞

大僧正（慈眼大師）
極月十一日　（花押）
安田左馬丞

③（包紙）「天神社寄附状」

紀州海士郡天神社領事
従先年廿三石之地令寄附之訖
今度重而二石分増加之都合
廿五石之地於名草郡馬場村之内
可収納之状如件
寛文四年七月廿五日　源頼宣（花押）

（書き下し文）
紀州海士郡天神社領の事
先年より二十三石の地、之を寄附せしめ訖ぬ。
今度重ねて二石分これを増加す。都合
二十五石の地、名草郡馬場村の内において
収納すべきの状、件の如し。
寛文四年七月二十五日　源頼宣（花押）

④（包紙）「殺生禁断御証文」

和歌浦天神社頭殺生
禁断之事依為
東照宮御境内一円先年
御証文不被遣之条神主
此旨可被相心得者也仍如件

寛文九年己酉九月日
下条弥右衛門（花押）
大沢善右衛門（花押）

（書き下し文）
和歌浦天神社頭殺生
禁断の事、
東照宮御境内一円たるにより、先年
御証文遣せられざるの条、神主
この旨相心得らるべきものなり。仍って件の如し。

寛文九年己酉九月日
下条弥右衛門（花押）
大沢善右衛門（花押）

⑤(箱蓋書)

	(書き下し文)
駒犬一対古物ニ付	駒犬一対古物につき
内陣江納置候様自	内陣へ納め置き候よう
前大納言様被	前(さき)の大納言(徳川治宝)様より
仰出候事	仰せ出され候事
御仕入方	御仕入方
天保七年	天保七年申十二月
申十二月	

○「(3)棟札に見る天満宮の発展」関係

和歌浦天満宮棟札一覧

番号	年号	銘文	総高×上幅	備考
1 展示	天正16年 8月吉日 (1588)	造立桑山修理重晴	63.4cm × 13.3cm	「関南天満宮末社 荒神社 棟札 天正十六年八月吉日」
2	慶長4年 2月吉日 (1599)	御本地堂一宇之処桑山治部卿法印宗栄	84.0cm × 9.4cm	
3 展示	慶長11年 11月24日 (1606)	奉造立神殿大檀越浅野紀伊守豊臣幸長朝臣遷宮左兵衛佐卜部朝臣兼治	114.4cm × 20cm	
4 展示	延宝5年 4月1日 (1677)	菅神廟万治元年戊戌国主命修繕 本廟及末社拝殿回廊唐門楼門瑞籬等今亦承命葺修之	96.5cm × 21.2cm	「清渓院様(光貞)御納筆者李梅渓」
5	元禄11年 9月吉日 (1698)	菅神祠本廟末社拝殿回廊唐門楼門瑞籬并本地堂等国主命修繕之	96cm × 22cm	「高林院様(綱教)御納筆者荒川景元」
6	宝永7年 11月吉日 (1710)	菅神祠本廟及拝殿回廊唐門瑞籬鳥居等国主命修繕之	96.1cm × 22cm	「当殿様(吉宗)御納筆者杉原豊長」

7	享保13年 12月吉日 (1728)	菅神祠本社并末社本地堂 国主命修繕之	95.4cm × 21.4cm	
8	安永元年 12月吉日 (1772)	菅神祠本社及別宮末社拝殿 唐門楼門瑞籬井籬紅梅籬鳥 居等 国主命修繕之	96cm × 21cm	
9 展 示	天保6年 12月 (1835)	天神社并瑞籬唐門拝殿鳥居 御本地堂庁家楼門其外末社 等漸破壊自 正二位前亜相源朝臣治宝卿 被修補之	147.5cm × 26.5cm	天保7年12月畢功
10	昭和11年 3月16日 (1936)	奉修理国宝天満神社本殿	99cm × 13.4cm	昭和11年6月25日上棟

和歌浦天満宮修理札一覧

番号	年　号	銘　　文	縦×横	備　　考
1	延宝5年 4月 (1677)	定	19.1cm × 21.5cm	当社御破損ニ付相勤役人
2	延享2年 3月 (1745)	御修復有之	20.5cm × 17.5cm	
3	宝暦6年 10月 (1756)	御修復	19cm × 18cm	
4	明和9年 10月 (1772)	御修復	21.3cm × 18.2cm	
5	天保6年 12月 (1835)	和歌天神社并瑞籬拝殿鳥居 御本地堂庁家楼門其外末社 等及大破、此度自正二位前 大納言様御修復之儀以思 召、天保六年未十二月御仕 入方江被仰出至同七年申十 二月御満作御上棟式相済候 事	24.8cm × 130.5cm	

棟札

①天正16年棟札

【表面】

一切日皆善一切宿皆賢諸仏皆威徳

(梵)　　造立桑山修理重晴

羅漢皆断漏以此誠実言願我成吉吉祥　天正十六年八月吉日

【裏面】

大工藤原作右衛門尉吉久　南無堅牢地神与諸眷属　敬

(梵)　　大法主日運

南無五帝龍王侍者眷属等　白

②慶長11年棟札

【表面】

奉行　生駒平兵衛尉藤原長兄　奉行　祝忠兵衛尉中原利長

奉造立神殿大檀越浅野紀伊守豊臣幸長朝臣遷宮左兵衛佐卜部朝臣兼治

慶長拾一丙午年十一月廿四日　大工　塀内七郎右衛門尉平吉政

【裏面】

(貼紙)

「慶長十一年丙午十一月廿四日

浅野紀伊守幸長殿御納」

③延宝 5 年棟札

【表面】

紀州海部郡雑賀庄和歌浦

菅神廟万治元年戊戌国主命修繕

本廟及末社拝殿回廊唐門楼門瑞籬等今亦承

命葺修之

延宝五年丁巳夏四月朔日

奉行 喜多村大之丞源正丘

九鬼半右衛門藤原隆俊

副奉行岡本五郎兵衛平重興

菅野久大夫菅原利昌

匠頭　中村新平平久幸

【裏面】

祝部安田主計正親

(貼紙)

「延宝五年丁巳四月朔日

清渓院様御納筆者李梅渓」

④天保 6 年棟札

【表面】

罔象女神　天神社并瑞籬唐門拝殿鳥居御本地堂庁家楼門　大寄合御仕入方元掛御用人兼　金沢弥右衛門熙昌

五帝龍神　其外末社等漸破壊自　御小性組番頭格御広舗御用人御用御取次見習　渥美源五郎藤原勝都

正二位前亞相源朝臣治宝卿被修補之　御仕入方御用掛

奉上棟天大中主神 天神社御永久吉祥　小十人頭格隠居御材木石奉行　井上兵次郎源金吉　棟梁水嶋卯左衛門

藤原弘隆

手置帆負命　天保六年未十二月至　御徒頭格御材木石奉行　田中良左衛門橘恒忠

彦狭知命　同七申十二月畢功　　御徒頭格御材木石奉行　小田数馬源元美
大御番格御材木石奉行　南出平左衛門源映明

【裏面】

天保七年丙申十二月十五日甲子吉祥

○「(4)奉納品の語る民衆文芸」関係

[俳諧]

一．元禄三(1690)　島順水『俳諧破暁集』全１冊
一．元禄四(1691)　島順水『俳諧渡船』全１冊
一．元禄五(1692)　島順水『申歳旦』１冊
一．元禄七(1694)　島順水『俳諧童子教』上中下３冊のうち中１冊
一．元禄八(1695)　島順水『俳諧茶弁当』全１冊
一．元禄八(1695)　島順水『亥歳旦』１冊
一．元禄九(1696)　島順水『子歳旦』１冊
一．宝永六(1709)　菅原秀勝『梅露』２冊のうち下１冊
一．延享元(1744)　木沢藤角『画発句橋の屑』全２冊

[和歌]

一．寛文元(1661)　森十兵衛忠雄(行年二十三)『奉納和歌三十首』１軸
一．元禄七(1694)　森十兵衛忠貫『詠法楽十五首和歌』１紙(十一面観音真言)
一．元禄八(1695)　『聖廟御宝前奉納十五首和歌』３冊21枚　？
一．元禄十五(1702)　『菅廟八百回忌奉納和歌三十首』短冊30枚　(「名前覚」別途)
一．享保七(1722)　『富士』絵と１首　１軸
一．享保十三(1728)　源清成(浅井忠八)『奉納菅廟十首和歌』１紙(鳥居興治の付記)
一．元文五(1736)　『奉納分字和歌十五』
一．寛延三(1750)　久能春子　歌巻　１軸
一．宝暦二(1752)　『八百五十年御神事奉納十首和歌』短冊10枚(「目録」別途)
一．宝暦二(1752)　願主藤原正臣『関南天満宮奉納十首』短冊10枚
一．宝暦二(1752)　『梅松桜奉納和歌』１箱(紀ノ川連中・粉河連中各１冊など)

一．文化五(1808)　正木弥九郎平時鎮『聖廟奉納十首和歌』１紙
一．年不詳　権中納言藤原為村『二月二十五日詠二十五首』
一．年不詳　詠草いろいろ　１箱(箱書き無し)
一．年不詳　『天満宮奉納和歌』１軸(鏡文字の１首、神号、絵)
一．年不詳　『天神御詠歌一万首』
一．年不詳　『六歌仙』色紙６枚(「目録」別途)
一．天保八(1837)　『三十六歌仙画筆者目録』

[連歌]

一．元禄六(1693)　和合院長海『夢想の連歌』１紙(包み)

[その他]

一．寛保二(1742)　『奉納　神筆』１紙(紺地、経文のような漢字数行)
一．年不詳　『天神講式』１軸(漢文、有罫。内容は講式。)
一．元文五(1736)～寛保三(1743)含む　『(題不詳)』１軸(漢文、俳諧、立花奉納連中)
一．年不詳　神号　小型１軸(箱書き「明和二　奉納百首和歌」)